発掘調査実績報告

徳島市庄・蔵本遺跡平成13年度発掘調査概要報告書
徳島大学ゲノム機能研究センター増築に伴う埋蔵文化財発掘調査

2002（平成14）年6月30日

徳島大学施設委員会
徳島大学埋蔵文化財調査室

1　調査地の名称

徳島市庄・蔵本遺跡

2　調査地

徳島市蔵本町２丁目（徳島大学蔵本団地内）

3　調査期間

平成 14 年 3 月 11 日～平成 14 年 6 月 10 日

4　調査面積

311 ㎡

5　調査体制

調査主体　　徳島大学施設委員会

委員長　齋藤史郎徳島大学学長

徳島大学埋蔵文化財調査室

室長　北條芳隆総合科学部助教授（3 月 31 日まで）

定森秀夫総合科学部助教授（4 月 1 日より）

調査員　中村　豊大学開放実践センター助手

調査補助員　岸本多美子・堺　圭子・重見美緒（4 月 1 日より）、以上施設部技術補佐員

6　遺跡の概要と調査の経過

庄・蔵本遺跡は徳島市蔵本町から庄町にかけて広がる遺跡である（第 1 図）。この遺跡は縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世という旧石器時代を除く日本史上のほぼすべての時代の遺跡が確認されている複合遺跡である。遺跡内容の豊富さでは徳島県内においてもっとも代表的な遺跡と言っても過言ではない。

本遺跡およびその周辺では徳島県教育委員会、徳島市教育委員会、徳島大学埋蔵文化財調査室等によってすでに多くの発掘調査が行われ上記各時代の多くの遺構・遺物を確認している。

今回の発掘調査は平成 14 年 3 月 11 日から実施し、6 月 10 日に撤収をふくむ全作業を完了した。

7　調査の成果

庄・蔵本遺跡では、3 つの遺構面に大別しえる。今回の調査でも、以下の 3 遺構面毎に調査した。

①中・近世

②弥生時代後期～古墳時代

③弥生時代前期

今回の調査区は、1998（平成 10）年に本調査室が実施したゲノム機能研究センター建設

にともなう埋蔵文化財発掘調査地点の西側隣接地点に相当する（第２図）。

４年前の調査では、第２遺構面に濃密な遺構がみられたため、今回も前例を活かし、第２遺構面調査に多くの時間を割くことにした。

８　主要な遺構

①第１遺構面（第３図）

今回の調査区は、攪乱が著しく、中・近世の遺構群の残存状況は必ずしもいいとはいえない。そうしたなかでも、調査区南よりに、近世の条里制にともなう溝（SD01）を検出した。この溝の南北にも浅い砂層を埋土とする溝状の遺構を検出しており、98 年度調査における、古代・中世の溝に相当する可能性がある。しかし、出土遺物が極めて少量で、決定的な証拠を確認することはできなかった。

また、この溝とほぼ直交するように SD02 を確認することができた。SDD02 は SD01 によって破壊されており、近世以前のものであるが、条理関係の溝であると考えられる。

②第２遺構面（第４図））

調査前から想定していたように、土坑・住居址・溝をふくむ多数の遺構を検出することができた。

土坑：土坑は 11 基確認することができた。いずれも遺物は少量で、遺物整理途上の現状で、明確な時期決定をおこなうことはできない。しかし、概ね弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺物が出土している。

住居址：住居址は２棟検出した。いずれも隅丸方形である。これも出土遺物が少なく、時期決定は非常に難しいが、古墳時代前期初頭以降から５世紀前後におさまるものと考えられる。SI01 は、中央に炉、周溝を備えた小型のもので、鉄鏃１点ほか鉄製品、滑石（結晶片岩）製の臼玉 13 点が出土している。

溝は１本、深さ 2m 幅 10m 以上を呈し、調査区北端を北東方向から南西方向に向かって、調査区をかすめている。既設ヒューム管、井戸によって大部分が失われていた。

出土遺物は大半が弥生時代後期（Ⅴ期）後半の土器によって占められ、台石や鉄製品、木製品若干が認められる。調査区北西には、溝中に土坑が存在し、杭や木材が廃棄されていた。

この溝は、県教育委員会が調査した動物実験施設地点において検出された弥生時代後期の大溝につながるものである。

第３遺構面（第５図）

第３遺構面では弥生時代前期の土坑１基を検出したにすぎない。遺物も少なく、生活面ではなかったと考えられる。

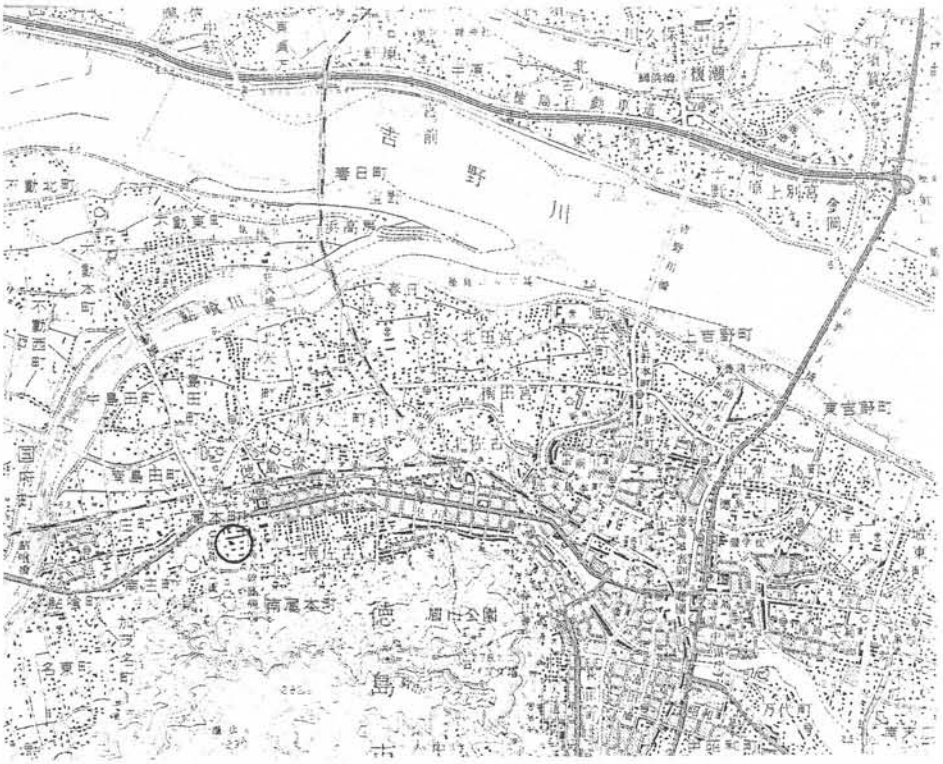
9　出土遺物の概要

出土遺物の量は以下の通りである。詳細は今後の整理作業に託したい。

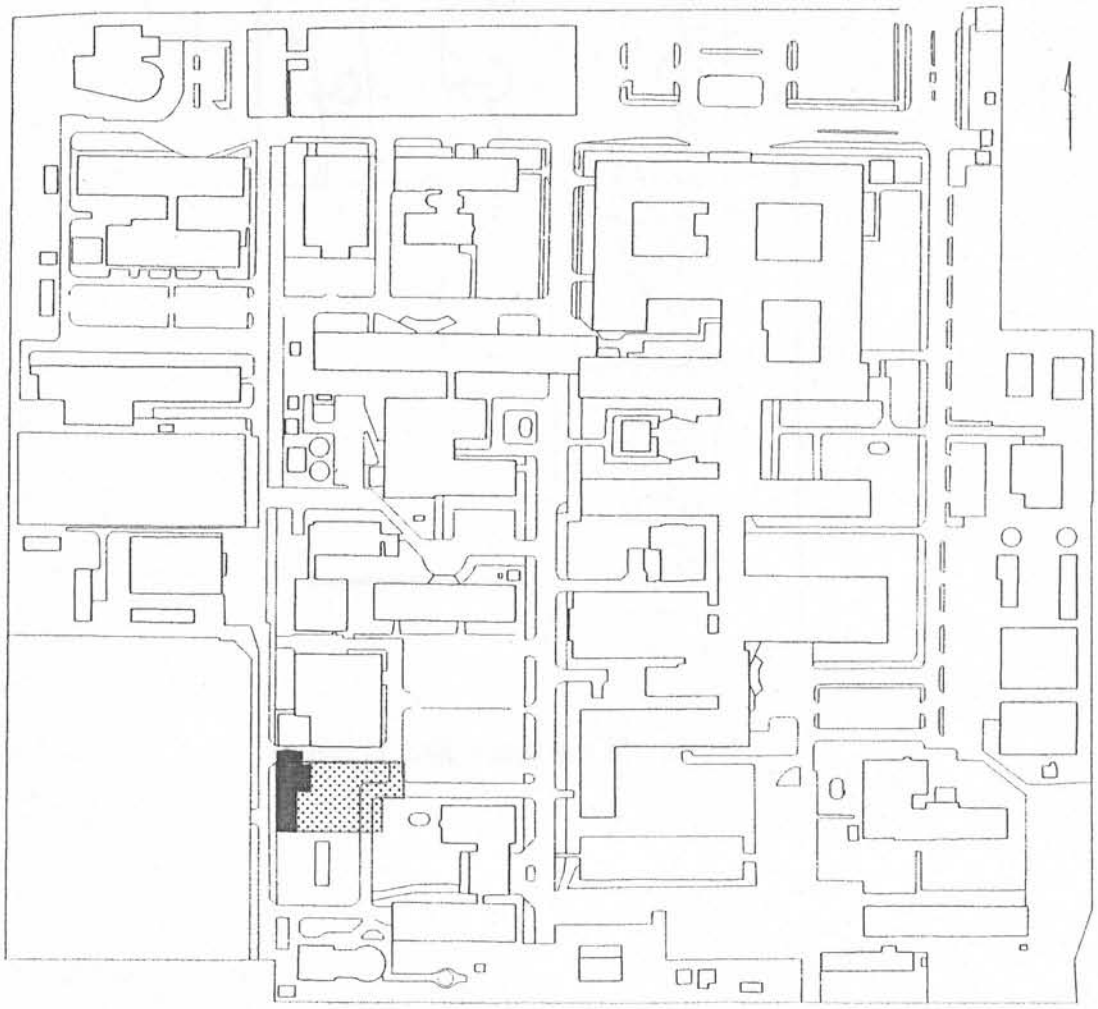
土器類	コンテナ 30 箱
石器類	5 箱
鉄器類	1 箱
木器類	9 箱

10　まとめ

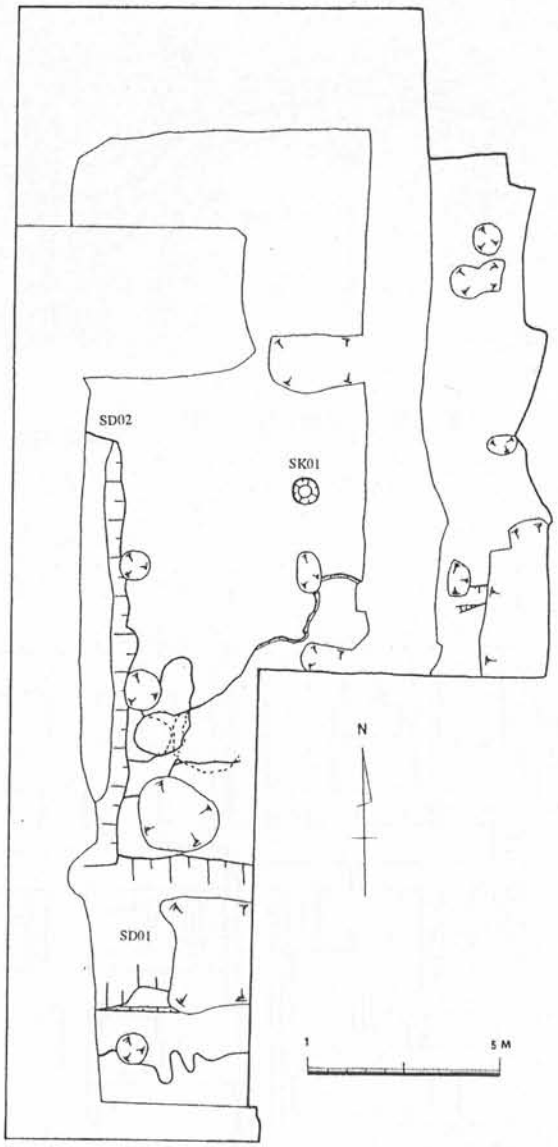
今回の調査では、調査面積も狭く、出土遺構・遺物とも限られたものとなった。しかし、第 2 遺構面において、多数の土坑、住居址が出土したことは、98 年度調査時に確認した弥生～古墳時代の集落が、より西へと広がることを確認することができた。また、県教育委員会が動物実験施設地点で調査した弥生時代後期の溝が、南西方向、すなわち眉山の谷へと向かって延びていることも確認しえた。なお、本遺跡で最も出土遺物・遺構の多い弥生時代前期の遺構はほとんど確認しえなかった。



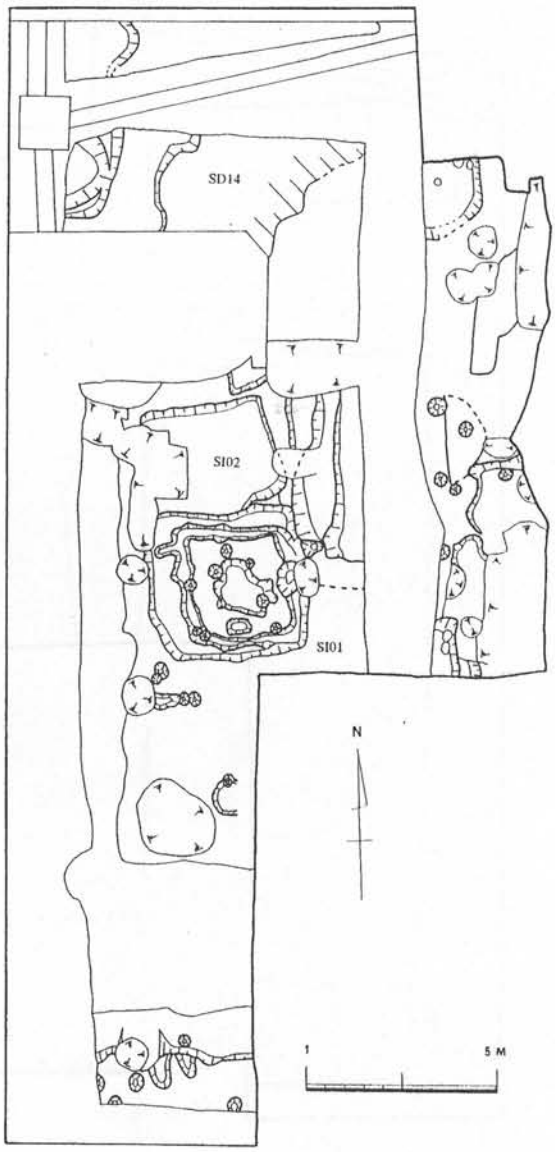
第１図　遺跡の所在地



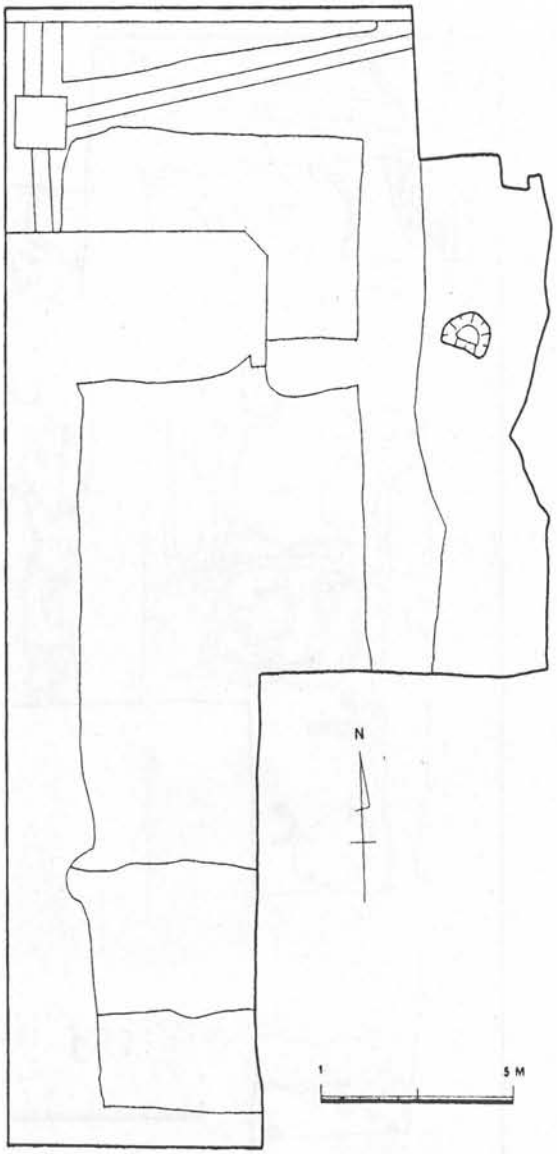
第２図　調査地の位置



第3図　第1遺構面平面図（1/200）



第４図　第２遺構面平面図（1/200）



第5図　第3遺構面平面図（1/200）

図版 1

SI01 炉検出状況　南より

SI01 完屈状況　南より

第 2 遺構面完掘状況　北より

図版 2

SD14 遺物出土状況　北より

SD14 完掘状況　北上方より

第 3 遺構面完掘状況